

無敬語地帯の敬語運用について

大阪市～田辺市方言グロットグラムをもとに

中井精一・谷口萌子

1. はじめに

南北に長い日本列島の自然的・地理的環境の多様性は、当然そこに住む人々の歴史にもきわめて多様な展開をもたらした。日本各地にはさまざまな地域社会が形成され、そこにはさまざまな人と暮らしが存在している。ただ、私たちが「日本」や「日本社会」と表現したり、説明をしようとする場合、ともすれば東京に代表される地域とその社会を想定しがちである。けれども東京を中心とした首都圏のことがわかれば、それで「日本」や「日本社会」がわかったことにはならない。

たとえば日本各地にあるさまざまな地域社会には、全国共通語とは異なる言語形式や運用法をもつ地域日本語(方言)が存在している。つまり「日本語」に関しても東京のことはや共通語のことがわかれば、「日本語」のことがわかったことにはならず、各地の方言の理解なくしては日本語の理解は深まらない。

各地の方言は、長い時間をかけてそれぞれの地域社会の特性にもとづいて形成されてきた。たとえば、話し相手や第三者との人間関係や社会関係を踏まえて使用される敬語(待遇表現)においても、地域ごとに独自の敬語形式や敬語運用法のあることは、よく知られている。以下では、無敬語地域として著名な紀伊半島西部における待遇表現体系および敬語運用に関する調査をもとに、その実態と特徴について報告したい。

2. 日本語敬語の地域性

日本語の敬語の地域差については、加藤(1973)や藤原(1978)、藤原(1979)でその概要が把握されている¹。大観すれば「西高東低」、すなわち西日本で複雑、東日本で単

¹加藤正信(1973)「全国方言の敬語概観」『敬語講座6 現代の敬語』明治書院 pp.25-83、藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂、藤原与一(1979)『昭和日本語方言の総合的研究第二巻 方言敬語法の研究』春陽堂

純と表現することができる。九州地方や大阪や京都、奈良といった近畿地方中央部では、尊敬表現のみならず、他の地方ではあまり発達していない謙讓表現も存在する。

加藤(1973)では、全国的な地域差について以下のようにまとめられている。

本稿の記述をもとに全国を分類すれば、まず、福島(会津を除く)から静岡にかけての太平洋側と紀伊半島南部のように、終助詞使用と命令・依頼の場合以外に敬語の枠がゼロである、いわゆる無敬語地域と、それ以外の有敬語地域に分けられる。もっとも、福島北部、山形内陸のところどころ、長野南部、高知などは両者の中間的性質をもっているようである。なお、伊豆諸島のうち、八丈島は有敬語、それ以北の島々は無敬語である。また、東京は無敬語地域の中の言語の島と言えよう。

とあるように、有敬語地域と無敬語地域、その中間といった具合に大別できることがわかる²。日本語の特徴の一つとして語られることの多い敬語であるが、敬語運用が希薄な地域が存在していることは特筆すべきである。

なお、東京については「無敬語地域の中の言語の島」と記述されている。現在、東京は、敬語使用地域であるが、もともとはその周辺と同様に、敬語の簡素な地域であった。しかし、江戸開府以降、都市化が進行する過程で、その必要性から、西日本の敬語



図1 「お読みになる」(加藤(1973))

² 加藤正信 (1973) 「全国方言の敬語概観」『敬語講座6 現代の敬語』明治書院 p.80 11.13-17

を受け入れたと言われている³。例えば、共通語の敬語として位置づけられている「レル・ラレル」なども、歴史的には近畿地方で発生し、使用されていた形式が、東京で使用されることになったことによっている。

なお、馬瀬(1988)では、以下のように述べている⁴。

日本方言の敬語は体系の上からどう分類したらよいか。従来、それは有敬語と無敬語方言とに分けられることが多かった。そして後者は、終助詞、命令・依頼による表現以外に敬語の粋がない方言とされた。私はこのような二分説に対し、三分説を提唱したい。

ここで提唱されている三分説とは「複雑敬語方言」、「単純敬語方言」、「無敬語方言」の三つの分類で、終助詞、命令・依頼の表現において敬語の形式をもつものを無敬語方言ではなく、単純敬語方言とするものである。



馬瀬(1988)は、加藤(1973)の無敬語方言をより実態に即して分類した点で高く評価されるものとする。図2は、『方言文法全国地図(GAJ)』の第6集第278図、第279図のデータをもとに終助詞の有無に注目して作成した言語地図である。敬語動詞や尊敬の助動詞をもたない「無敬語地域」において、終助詞が敬語的な働きをしている地域(▲)があり、長野県内は、「複雑敬語方言」、「単純敬語方言」ということになる⁵。この分類は、「対者」「聞き手」に対する

³ 小松寿雄 (1971)「近代の敬語Ⅱ」『講座国語史5 敬語史』大修館書店 p.286 参照

⁴ 馬瀬良雄 (1988)「方言の敬語—その分類、若年層の特徵的傾向など」『国文学 解釈と教材の研究』33 (15) p.33 ll.上段 10-11、下段 1-2

⁵ 国立国語研究所 (2006)『方言文法全国地図第6集 表現法編3 (待遇)』の278図、第279図は、聞き手に対して、ここに来るか非常に丁寧に尋ねるときどのように言うかという質問の回答をまとめたものである。

待遇表現に注目した場合に可能となる分類である。対者敬語は、目の前にいる相手に行く直接的な言語行動であるため、より丁寧で上位の形式を選択する可能性があり、敬語行動が希薄とされる紀伊半島や四国の沿岸部でも「複雑敬語方言」と位置づけてしまう可能性がある。

次に近年実施された調査をもとに現状を概観してみたい。全国方言分布調査(FPJD)は、国立国語研究所の大西拓一郎氏をプロジェクトリーダーとして、方言の形成過程を明らかにすることを目的に行われた全国的な方言調査である。2010年から2015年の約6年をかけて全国554の地点で調査が実施された。話者は、原則として70歳以上、長期にわたってそれぞれの場所から移動していない。調査結果の報告およびデータの公開、それに関連した論文・書籍が近年出版された⁶。

FPJDには、語彙、文法、待遇表現などさまざまな項目があるが、その中の待遇表現の結果および考察については、中井(2017)で確認することができる⁷。目上の第三者が動作主体の場合の中上位場面で使用される待遇表現の分布変化を把握することを目的にした「G-108 先生が来る(近所の知り合いの人にむかって)」、「G-109 先生が来る(自分の父親にむかって)」、「G-110 先生が来る(親しい友達にむかって)」、「G-111 父親が来る(親しい友達にむかって)」、「G-112 友達が来る(親しい友達にむかって)」の5項目の結果から、分布状況の概観および考察がなされている。ここでは5項目の中で最も敬語形式が出現しやすく、その地域差もより明確に表われると考えられる「G-108 先生が来る(近所の知り合いの人にむかって)」について見る。質問文は「近所の知り合いの人にむかって、やや丁寧に「もうすぐ先生が来る」と言う時、「先生が来る」のところをどのように言いますか。」である。その分布を見てみると、図3のようになっている。

概観すれば、西日本ではさまざまな敬語形式が見られ、東日本では比較的簡素であると言える。加藤(1973)と大きくは変わらないように見える。

しかしながら、有敬語地域と無敬語地域の分布を見るため、敬語のない形式である

⁶ 大西拓一郎(編)(2016)『新日本言語地図』朝倉書店

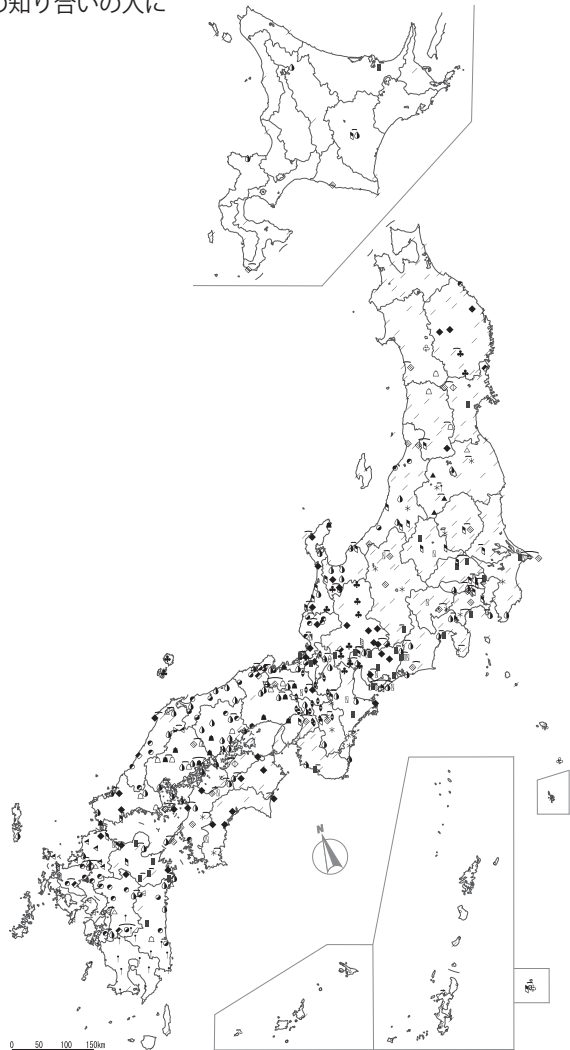
大西拓一郎(編)(2017)『空間と時間の中の方言』朝倉書店

⁷ 中井精一(2017)「日本語敬語の多様性とその変化」大西拓一郎(編)『空間と時間の中の方言』朝倉書店 pp.85-105

「クル」(／)の分布に注目すれば、東北地方、東京を除く関東地方、静岡県、長野県といった東日本を中心に、和歌山県、高知県など西日本各地でも回答されている。加藤(1973)よりも広範囲にわたって、敬語のない形式「クル」の分布を確認することができ、無敬語地域は、実際にはかなり広い地域に分布していると考えられる。

図3 FPJD G-108
〈先生が〉来る：近所の知り合いの人に

- 1 ○ コラレル
- 2 ● キナサル
- 3 ◆ キハル
- 4 ⊕ キャール
- 5 ▲ コラッシャル
- 6 ▼ キサッシャル
- 7 ◀ コラス
- 8 ● キナル
- 9 ○ キテ
- 10 ▲ キテヤ
- 11 ↑ キヤル
- 12 △ コラル
- 13 ▲ キラル
- 14 * キテクレル
- 15 / クル
- 16 ▽ イラッシャル
- 17 ▮ イラス
- 18 ◆ オイデナサル
- 19 ○ オンサル
- 20 ◆ オイデニナル
- 21 ◇ オイデテクレル
- 22 ◆ オイデル
- 23 ⊕ オコシニナル
- 24 ▮ ミエラレル
- 25 ▮ ミエナサル
- 26 ▮ オミエニナル
- 27 ▮ ミエル
- 28 ♣ ゴザル
- 29 ⊕ オジャル
- 30 ○ その他



3. 無敬語地域の敬語運用について

3.1 調査と調査データの収集について

全国方言分布調査(FPJD)の結果から、敬語の地域差は現在に至っても「西高東低」であるが、和歌山県や高知県のように西日本の一部では、敬語運用が希薄であることが確認された。そこで、大阪市から和歌山南部にある田辺市にかけての地域を対象に、グロットグラム調査を実施した(図4)。

大阪市～田辺市間方言グロットグラム調査は、2015(平成27)年～2017(平成29)年度科学研究費(基盤研究(B)(1))「無敬語地帯の地域特性と敬語行動」(研究代表：中井精一、研究課題番号：15H03204)において、大阪市から田辺市にかけて実施した調査である。平成31年には「大阪市～田辺市間方言グロットグラム調査」として報告書が刊行されている⁸。

大阪市～田辺市間方言グロットグラム調査では、大阪市から田辺市までの50地点で、各地点で生まれ育った10代～80代の4世代(おおよそ10代・20代・30代～40代・50代～60代・70代～80代)に面接調査を実施した。

図4 大阪市～田辺市間方言グロットグラム調査地域



3.2. 分析対象項目

ここでは、以下の項目について検討する。

C-3 〈聞き手が〉来るか：
土地の目上に
この土地の目上の人にも
かって、ひじょうにいてね
いに「あしたもここに[来る
か]と聞くとき、「ここに
来るか」のところをどのよ

⁸ 中井精一(編)(2019)「大阪市～田辺市間方言グロットグラム」『紀伊半島西部沿岸域における言語の動態的研究』田辺市教育委員会

うに言いますか。

C-13-1 ○○へ行く

「○○へ行く」と言う場合、丁寧な言い方からぞんざいな言い方まですべて教えてください。

C-13-2 どこに行くのか：母親に

家の中で、家族(母親)と和やかに話しているときに、

「出身校の校長が公園の方に行く」と母親に言うとき、「行く」のところをどのように言いますか。

C-13-4 どこに行くのか：東京のテレビ

東京のテレビ番組で話している場面を想像してください。そのとき、「出身校の校長が公園の方に行く」と言うとき、「行く」のところをどのように言いますか。

4. 結果と考察

4.1 待遇表現体系の現状

まず、「C-13-1 ○○へ行く」(図5)をもとに当該地域における待遇表現体系を示す。「C-13-1 ○○へ行く」では、「行く」と言う場合に使用するすべての待遇表現形式を尋ねている。聞き手の行動を言うか、第三者の行動を言うか、また、目上か、目下かなどの別は問うていない。結果は、図5の通りである⁹。大阪市とそれ以外という視点で見れば、この2つの地域では、はっきりとした差が見られる。

まず、堺市以南、つまり和歌山県および大阪府泉州地域に注目する。この地域では、「○」で示された「イカレル→イク」や「／」で示された「イク」が圧倒的に多い。また、近畿地方中央部で用いられる「ハル」については、**■●**などの記号を見ることでその分布がわかるが、この調査項目において当該地域では、「ハル」を使用している話者は少ない。また、下向きの待遇を表す「ヨル」については、記号の右上に付された小さな点でその分布を見ることができ、当該地域ではその使用がほとんど確認されなかった。また、年齢による差はあまり見られない。

GAJやFPJDなどこれまでの調査からもわかるように、大阪府南部から和歌山県で

⁹ グロットグラム図は、中井精一(編)(2019)「大阪市～田辺市間方言グロットグラム」『紀伊半島西部沿岸域における言語の動態的研究』田辺市教育委員会からの引用。

は、「イク」の他、尊敬の助動詞「レル」を用いた「イカレル」は幅広い年齢層で使用されていることがわかる。近畿地方中央部で使用されている「ハル」は数名しか使用が確認できず、「オイキニナル」や「イラッシャル」などの使用も確認できない。また、下向きの待遇を表す「イキヨル」や「イットル」はわずかに見られるが、広く使用されているとは言えない。

一方、大阪市の3地点、阿倍野区(王子町)、東住吉区(南田辺)、住吉区(我孫子)に注目すると、堺市以南とは全く異なった様相を見せる。10代の話者のなかには「イク」

大阪～紀伊田辺グロットグラム C-13-1 ○○へ行く
 質問文:「○○へ行く」という場合に、もっとも丁寧な言い方からぞんざいな言い方まで、すべて教えてください。

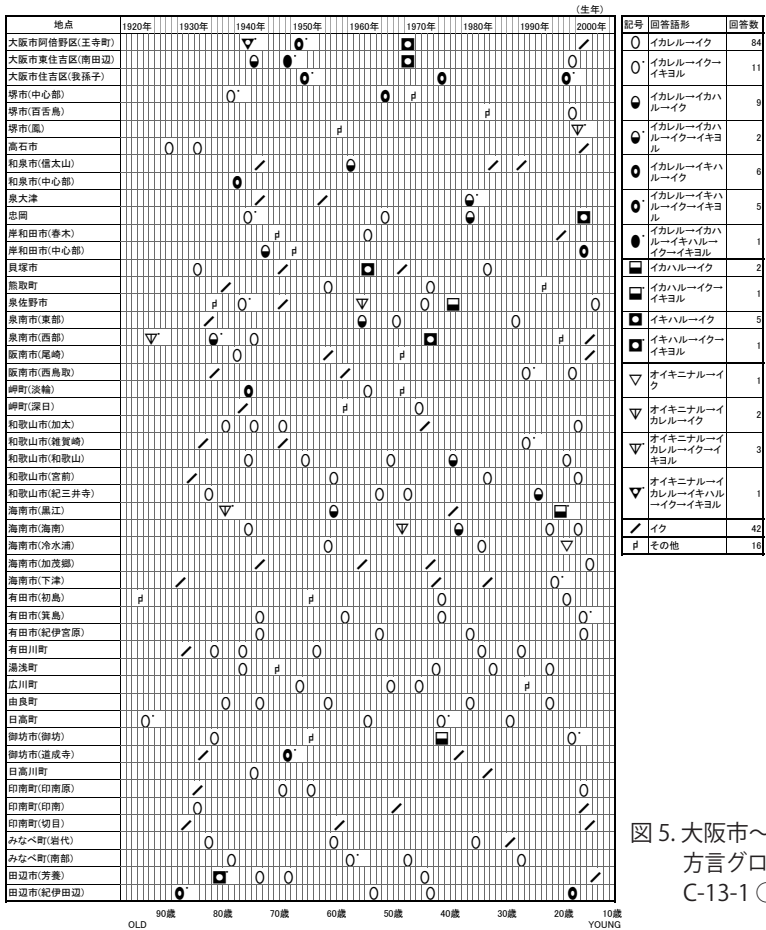


図 5. 大阪市～田辺市間
 方言グロットグラム
 C-13-1 ○○へ行く

日本語における無敬語と言語の辺境性
 大阪～紀伊田辺グロットグラム
 (2019.3 富山大学中井研究室)

(／)や「イカレル→イク」(○)という回答もあるが、ほとんどの話者は、「イカレル→イキハル→イク→イキヨル」(●右上に点有り)、「イキハル→イク」(◐)、「オイキニナル→イカレル→イキハル→イク→イキヨル」(▽右上に点有り)のように「ハル」や「ヨル」などの使用が見られ、敬語使用の段階数やバリエーションの多い。また、この地域では、「ハル」や下向きの待遇を表す「ヨル」が広く使用されている。

4.2 対者敬語の現状

大阪～紀伊田辺グロットグラム C-3〈聞き手が〉来るか：土地の目上に
 質問文：この土地の目上の人にむかって、非常に丁寧に「明日もここに来るか」と聞く場合、「来るか」の部分をもどくに言いますか。

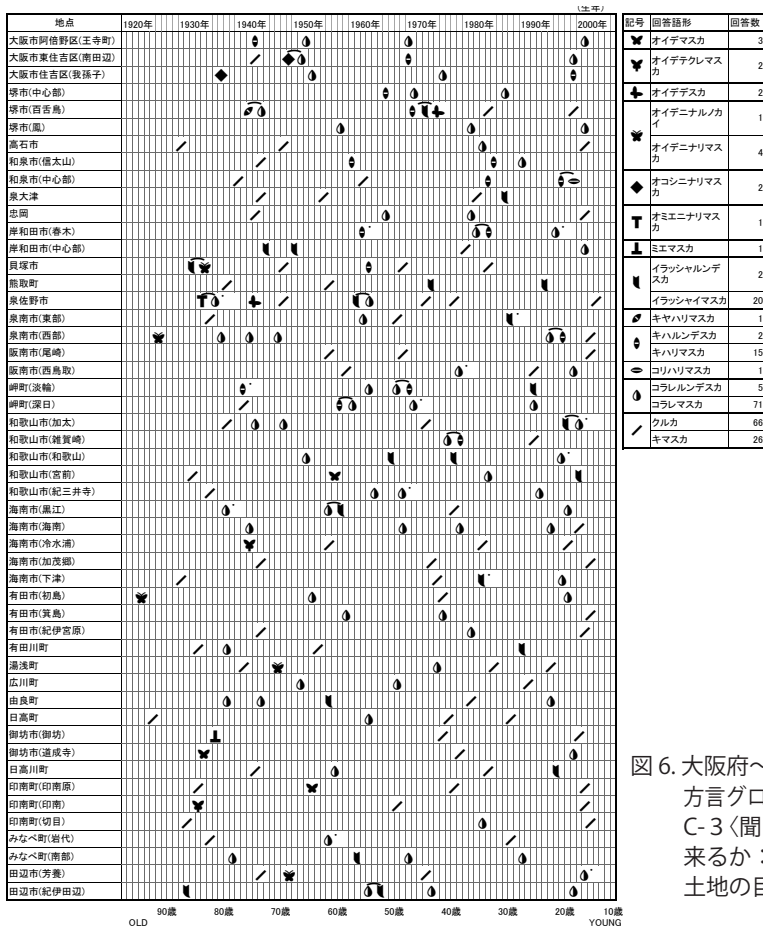


図6. 大阪府～田辺市間
 方言グロットグラム
 C-3〈聞き手が〉
 来るか：
 土地の目上に

次に、「C-3〈聞き手が〉来るか：土地の目上に」(図6)で、聞き手が目上である場合にどのような待遇表現を使用されるかを見る。この項目は、土地の目上の人に対して、非常に丁寧に「来るか」と聞くときにどのように言うかを尋ねたものである。結果は、図6の通りである。目上に対して、直接尋ねる場面であるため、比較的敬語形式の出現が高いと考えられる項目である。図6の右側にある集計表を見ると、「コラレマスカ」(71回答)と敬語ゼロ形式である「クルカ」(66回答)が拮抗していることがわかる。

堺市以南を見ると、「クルカ」「キマスカ」(ノ)といった尊敬語を伴わない形式に加え、「コラレマスカ」「コラレルンデスカ」(ト)といった「レル・ラレル」も広い世代に用いられていることがわかる。「レル・ラレル」は、今回の調査対象地域の南端に位置する田辺市(紀伊田辺)でも使用が確認でき、「敬語使用が極めて希薄」と言われる地域でも、現在では広く使用されている形式と言える。また、60代以上を中心に「オイデニナリマスカ」や「オイデマスカ」(マ)などの形の記号)といった敬語動詞も使用されている。堺市(中心部)から岸和田市(春木)辺りの地域では、「キハリマスカ」「キハルンデスカ」(ク)のような「ハル」も使用されていることがわかる。

対して、大阪市の3地点、阿倍野区(王子町)、東住吉区(南田辺)、住吉区(我孫子)では、尊敬語の使用のない「クルカ」「キマスカ」(ノ)は1名にとどまり、最も多いのは「コラレマスカ」「コラレルンデスカ」(ト)のような「レル・ラレル」である。したがって「キハリマスカ」「キハルンデスカ」(ク)はそれほど多く使用されていない。また、堺市以南では全く見られなかった「オコシナリマスカ」(ク)の使用が確認された。

以上のように、聞き手に対する敬語いわゆる対者敬語の使用においても、やはり、大阪市内と堺市以南では、大きく様相が異なっていた。堺市以南では、待遇表現体系を尋ねた際は、多くの地点で使用が確認された「レル・ラレル」であったが、土地の目上には「クルカ」や「キマスカ」で十分とする話者も多く、知識としての体系と日常における使用は異なることがわかる。

4.3 第三者敬語の現状および公的場面での使い分け

第三者に対してどのような待遇表現を使用しているかについては、「C-13-2-a〈出身校の校長が〉行く：母親に」(図7)および「C-13-4-a〈出身校の校長が〉行く：東京のテレビで」(図8)をもとに考えてみる。

「C-13-2-a〈出身校の校長が〉行く：母親に」では、母親と和やかに話している場面で、出身校の校長が「行く」ということを母親に伝えるときにどのように言うかを尋ねている。結果は図7の通りである。まず、堺市以南に注目すれば、「イク」(●)が圧倒的に多く、先の「C-13-1 ○○へ行く」や「C-3〈聞き手が〉来るか：土地の目上に」で使用が確認できた「レル・ラレル」形式の「イカレル」(／)はわずかにしか見られない。井上(1981)では、素材敬語が対者敬語の使用にほぼ対応する形で用いられる現象、つまり丁寧語を用いない対象と話すときには、第三者への敬語も使用されないという現象が明らかにされているが、当該地域においても、その傾向が読み取れる¹⁰。

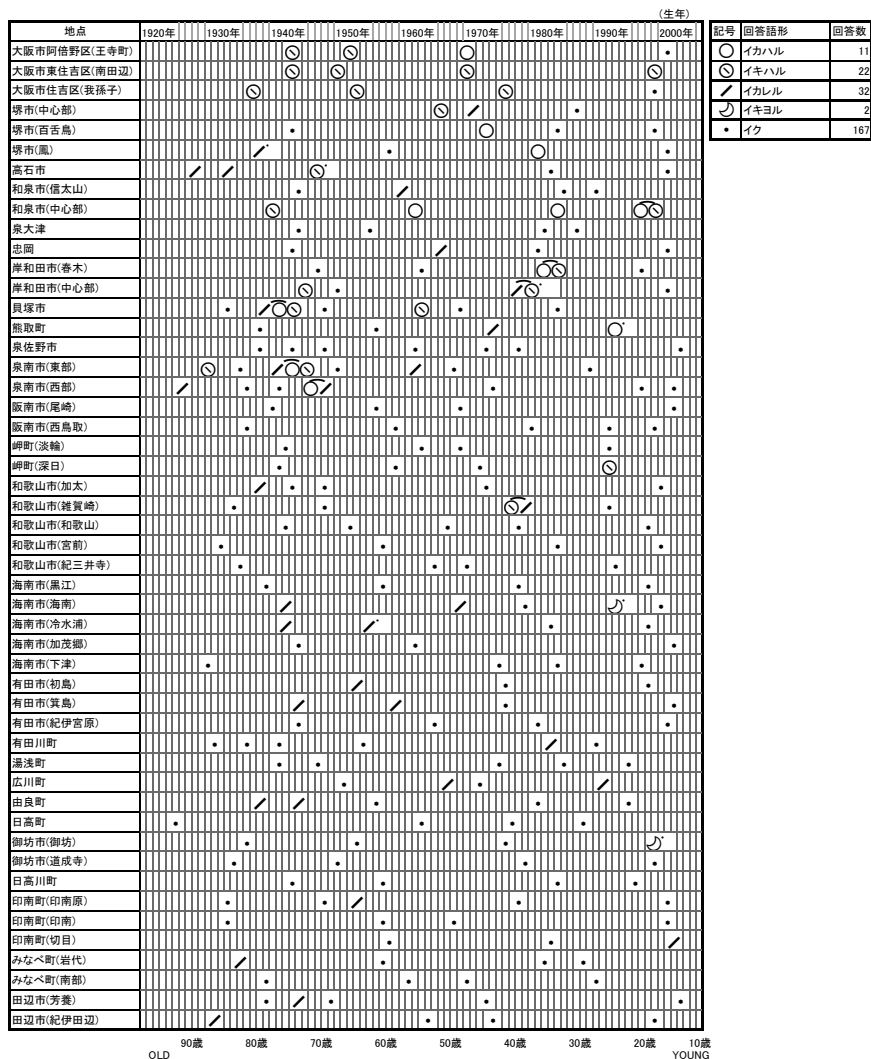
対して、大阪市内では、「C-13-2-a〈出身校の校長が〉行く：母親に」で、10代の話者1名以外は全員が「イカハル」(○)や「イキハル」(◎)といった「ハル」を使用し、母親との会話という比較的和やかな場面においても、「ハル」を用いていることがわかる。敬語がどのような場面で使用されるかといった敬語の運用を巡っても、大阪市とそれ以南では、異なる状況が読み取れる。

次に「C-13-2-a〈出身校の校長が〉行く：母親に」と比較するため、「C-13-4-a〈出身校の校長が〉行く：東京のテレビで」を見る。結果は図8の通りである。C-13-2-aでは聞き手は母親だったが、この項目では、東京のテレビという公の場面が設定されている。C-13-2-aの結果とは傾向が変わり、まず堺市以南に注目すれば、「イク」(●)よりも「イカレル」(／)が多い。和歌山県内の数名の話者からは、「オイキニナル」(▲)といった非常に待遇度の高い形式、和泉市(信太山)から阪南市(尾崎)辺りでは、「イカハル」(○)や「イキハル」(◎)も使用されている。

大阪市内では、「イカハル」(○)や「イキハル」(◎)の使用はほとんど見られず、どの世代、地点でも「イカレル」(／)が多い。「ハル」使用の有無だけではなく、「ハル」をどのような場面で使用するのかといった運用に関しても、二つの地域間には違いがある

¹⁰ 井上史雄(1981)「敬語の地理学」『国文学 解釈と教材の研究』26(2)学燈社 pp.39-47

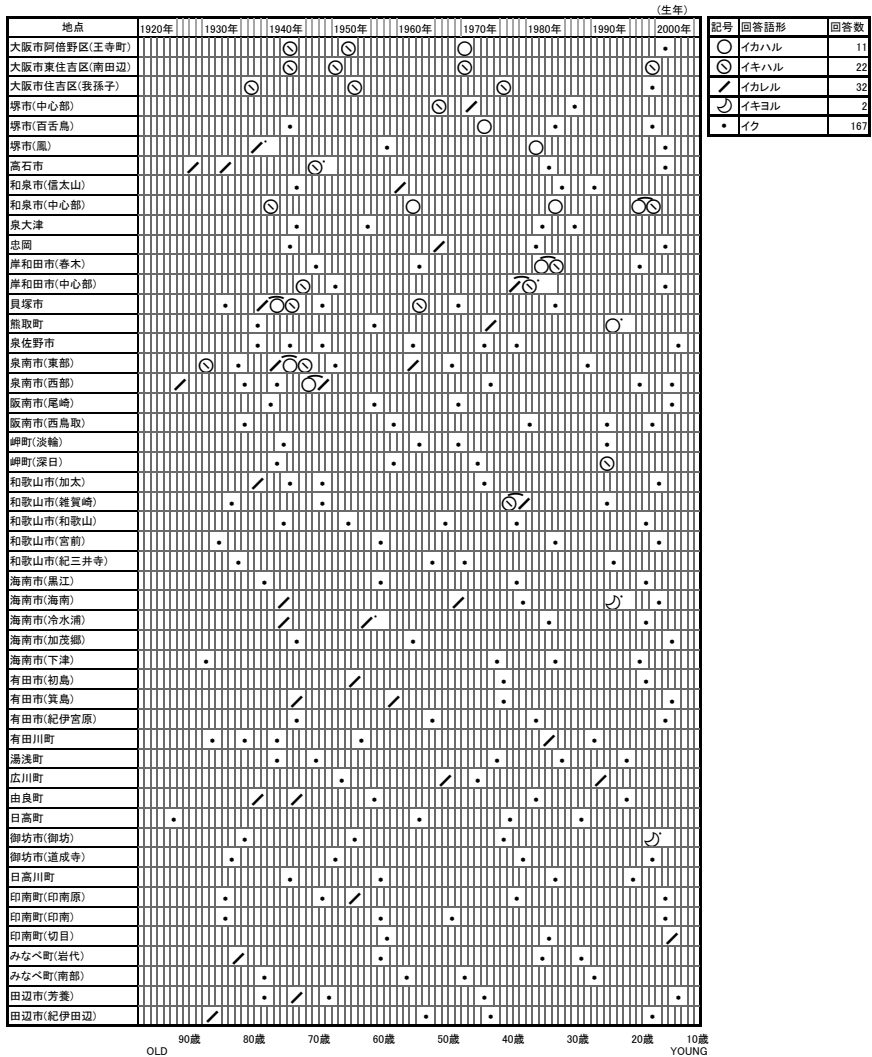
大阪～紀伊田辺グロットグラム C-13-2-a 〈出身校の校長が〉行く:母親に
 質問文:家の中で、母親と和やかに話をしている場面を想像してください。そのとき、出身校の校長が「公園の方に行く」と母親に言う場合、「行く」の部分をごどのように言いますか。



日本語における無敬語と言語の辺境性
 大阪～紀伊田辺グロットグラム
 (2019.3 富山大学中井研究室)

図 7. 大阪市～田辺市間方言グロットグラム C-13-2-a 〈出身校の校長が〉行く:母親に

大阪～紀伊田辺グロットグラム C-13-4-a 〈出身校の校長が〉行く：東京のテレビで
 冒険文：東京のテレビで話している場面を想像してください。そのとき、出身校の校長が「公園の方に行く」と言う場合、
 「行く」の部分をごどのように言いますか。



日本語における無敬語と言語の境界性
 大阪～紀伊田辺グロットグラム
 (2019.3 富山大学中井研究室)

図 8. 大阪市～田辺市間方言グロットグラム C-13-4-a
 〈出身校の校長が〉行く：東京のテレビで

と考えられる。この違いは、「ハル・ヤハル」を日常的な使用する大阪市内とそうでない堺市以南の違い、すなわち日常的に「ハル・ヤハル」を使用する地域では、公的な場面では、共通語的色彩の強い「レル・ラレル」を使用するが、そうでない堺市以南は、「ハル・ヤハル」を近畿中央部で使用される上品な敬語形式と理解しているため、東京のテレビという公的な場面で使用したと考えられる。

5. まとめ：無敬語地帯の敬語運用について

以上、「大阪市～田辺市間方言グロットグラム」をもとに、敬語体系(「C-13-1 ○○へ行く」)、対者敬語(「C-3〈聞き手が〉来るか：土地の目上に」)、第三者敬語(「C-13-2-a〈出身校の校長が〉行く：母親に」)公的な場面での敬語使用(「C-13-4-a〈出身校の校長が〉行く：東京のテレビで」)を取り上げ、敬語体系や敬語運用について考えてみた。

堺市以南では、共通語敬語としての「レル・ラレル」は年齢層、地域を問わず、広く使用が見られる一方で、「イク」「クル」のようなゼロ形式も同じように広く使用されていた。また、一部には、近畿地方中央部で使用される「ハル・ヤハル」の使用も見られた。これに対して、大阪市内では「ハル・ヤハル」のみならず、下向きの待遇表現形式である「ヨル」も使用され、待遇表現の段階数や形式のバリエーションが豊かであることがわかった。また、運用面でも、大阪市内と堺市以南とは大きく異なっていた。

「先生」に対する敬語運用規範と実態については、大阪市～田辺市間方言グロットグラムの「C-10-2〈聞き手が〉いるか：先生に」をもとに考察した。学校の先生は目上となり、敬語形式が用いられやすいと考えられるが、「丁寧語のみ」が最も多く40%、「尊敬語+丁寧語」は35%、「敬語ゼロ」が24%、「尊敬語のみ」は1%となった。尊敬語のない「丁寧語のみ」と「敬語ゼロ」を合わせれば、54%と半数以上になる。調査時のコメントによれば、ほとんどの話者は、学校の先生は「目上」であり「敬意を表すべき」「尊敬すべき」対象と捉えていたが、敬語形式を伴わない言語行動をとる場合が多いことがわかる。

「近所の目上の人」に対する敬語運用である「C-3〈聞き手が〉来るか：土地の目上に」の回答については、「尊敬語+丁寧語」が最も多く46%、「丁寧語のみ」が34%、「敬語ゼロ」が18%、「尊敬語のみ」が2%と続く。ここでも、18%の人が敬語を全く使用していなかった。「クル」のように敬語形式の伴わない回答をした話者からも、近所の年上

の人に対しては、丁寧なことばを使わなければならないと意識しながらも、やはり「クル」という敬語形式の伴わない言語行動になってしまうことがわかった。

このように個別地域の敬語運用と意識に注目すると「有敬語」・「無敬語」といった区別は、「有敬語地帯」である近畿地方中央部とその影響を受けた西日本ならびに東京などの都市言語に基軸をおいた視点であることがわかる。つまり上方や江戸、京阪や東京の敬語運用を基準として「日本語敬語」の特徴を語ったところで、「日本語敬語」の実態とはほど遠く、この指標を見直す努力をしない限り、日本語敬語の理解は深まらないように思う。個別地域の地域特性と「敬語」の実相にアプローチするのは、たやすくはないが、日本語敬語研究に取り組む者として、今後の取り組むべき方向を述べて結びとしたい。

参考文献

- 井上史雄(1981)「敬語の地理学」『国文学 解釈と教材の研究』26(2)学燈社pp.39-47
- 大西拓一郎(編)(2016)『新日本語地図』朝倉書店
- 沖裕子 (2018)「長野県方言敬語の発想と表現」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房
- 沖裕子 (2020)「談話論からみた長野県北信方言の絶対敬語」『學海』6 上田女子短期大学総合文化研究所 PP.21-39
- 加藤正信(1973)「全国方言の敬語概観」『敬語講座6 現代の敬語』明治書院pp.25-83
- 加藤正信(1977)「方言区画論」『岩波講座 日本語11 方言』岩波書店pp.41-82
- 岸江信介・中井精一(1999)『大阪～和歌山間方言グロットグラム』摂河泉地域史研究会
- 中井精一(2002)「西日本言語域における畿内型待遇表現法の特質」『社会言語科学』第5巻第1号, 社会言語学会pp.42-55
- 中井精一(2012)『都市言語の形成と地域特性』和泉書院
- 中井精一(2017)「日本語敬語の多様性とその変化」大西拓一郎(編)『空間と時間の中の方言』朝倉書店pp.85-105
- 中井精一(編)(2019)「大阪市～田辺市間方言グロットグラム」『紀伊半島西部沿岸域における言語の動態的研究』田辺市教育委員会pp.1-72
- 西尾純二(2015)『マイナスの待遇表現行動—対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮』くろしお出版

藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂

藤原与一(1979)『昭和日本語方言の総合的研究第二巻 方言敬語法の研究』春陽堂

馬瀬良雄(1988)「方言の敬語」『国文学 解釈と教材の研究』33-15學燈社pp.33-40

宮治弘明(1987)「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151, pp.38-56

なかい せいいち(富山大学教授)

たにくち もえこ(大阪大学非常勤講師)